

「健康が一番」

鹿児島第一中学校三年

廣瀬清楓ひろせさやか

医師の言葉に青ざめる母の表情に、一瞬異様なものを感じ涙が出ました。

学年末テスト前日の朝、体が熱くて検温してみると三十八度あったのです。母に相談し病院に向かいました。頭痛が激しくなり熱も四十度を越えていました。先生の話に朦朧として受け答えすら出来ない状態になっていたのです。記憶のなかにあるのは、母が甲高い声で先生に質問していることだけです。詳しい検査をするために早急に総合病院に搬送されました。原因が『腎盂腎炎』だということが分かり入院することになったのです。それまでいたって健康で風邪をひくこともなかったのに、二週間ベッドに横たわり点滴続きの毎日でした。食事もとれない日が続きました。トイレにも介助されなければいくことが出来なかったのです。

入院している間ずっと考えていたことがあります。三年前に亡くなった祖父のことです。祖父は口癖のように言っていました。

「健康が一番、百まで生きるよ。」

しかし、健康に気配りしていた祖父が腎臓を悪くして人工透析を受けるようになったのです。生死にかかわるからと食事制限までして透析を週三回続けていました。腕には針跡が無数もあり、たん瘤のように盛り上がっていました。私も祖父のようになるかもしれないと、毎日のように泣いていたのです。

退院までの間、何度も検査が行われました。

数値も次第に正常に戻りつつありました。退院を数日後に控えたとき祖母と母が病室に訪ねてきてくれました。普段通りの会話がありました。母が言いました。

「こうなったのも自己責任だよ。もしかしたら透析をすることになっていたのかもしれないからね。」

人一倍健康にうるさい母の言葉に驚きました。返す言葉がありませんでした。母は常々すべてが自己責任だと言います。だから体調には気をつけていました。今考えると数日前から異変を感じていたのです。規則正しい生活を心がけていたのに、生活リズムが崩れていました。母に話しました。一番トイレに行くことを我慢して勉強していたことをです。

「それ最悪だよ。あれほど体調には気をつけなさいと言ってたのに。」

母の言葉は強かったけれど、なぜかホッとしました。無事、退院した今でも健康には気がつけて定期的に検査は続けています。誰もが経験したことの無い辛い苦しい思いをしましたが。だからこそ健康であることが幸せなのかも痛感しています。

人生百年時代を迎えようとしています。この先、母の言葉をかみしめながら生活リズムを崩さずに過ごして行きます。それが自分の健康を守ることになるし、健康でいることが家族の願いや、幸せ、笑顔に繋がると思うからです。祖父の「健康が一番」を忘れずに。